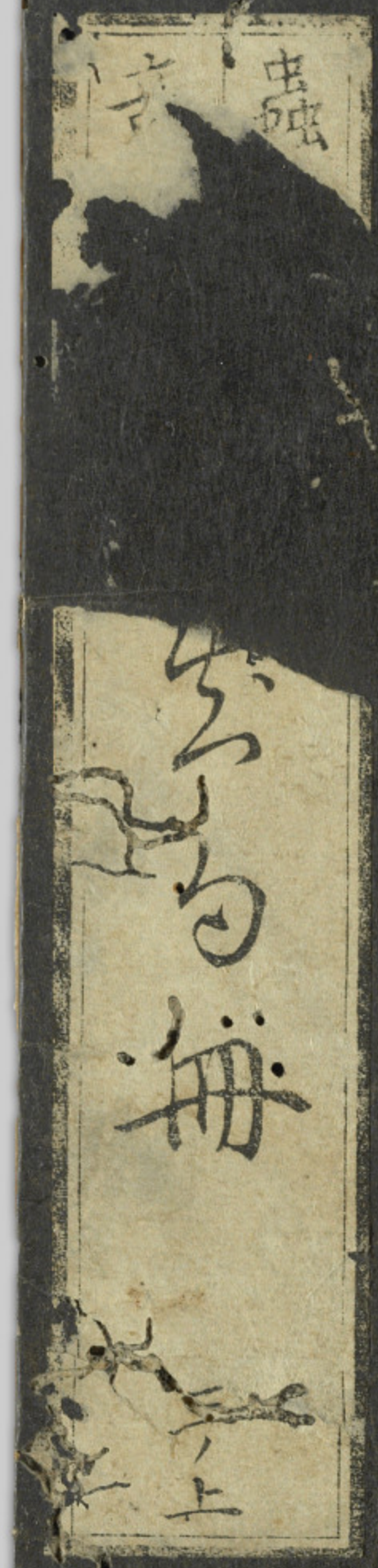



PL
795
H65
C4
1796
v.3:1

AS

V.13-1

出入多夜話涉芳乘三

蚤虫玉虫獄屋入事

鳥蛇頭白成事

蚋馬蠅角生事

菜虫変化退治事

蚊蜘蛛切沸釵賜事

螢蚤虫救勢集事

蚓蚤虫諫言事

附 蚤虫（つるむしをふせぐ）蛇蚊（ろそ）

蚤虫（つるむしをふせぐ）害十事



渋茶（しぶちや）茶（ちや）三

かくて壺（つぼ）にいれふかくおしつけ
てをきすこしのあひだにてもよろ
しくも

苑（その）の小蝶（こてう）地（ち）さくや下茶（したちや）
杜（もり）の虫（むし）ハうしとうまどめ

春（はる）ことに杜（もり）をハうしとうまどめ
ありもそこに発（たつ）虫乃（むしの）こと

うしとうまどめ小（ちひ）さき虫（むし）の本源（もとつく）まで

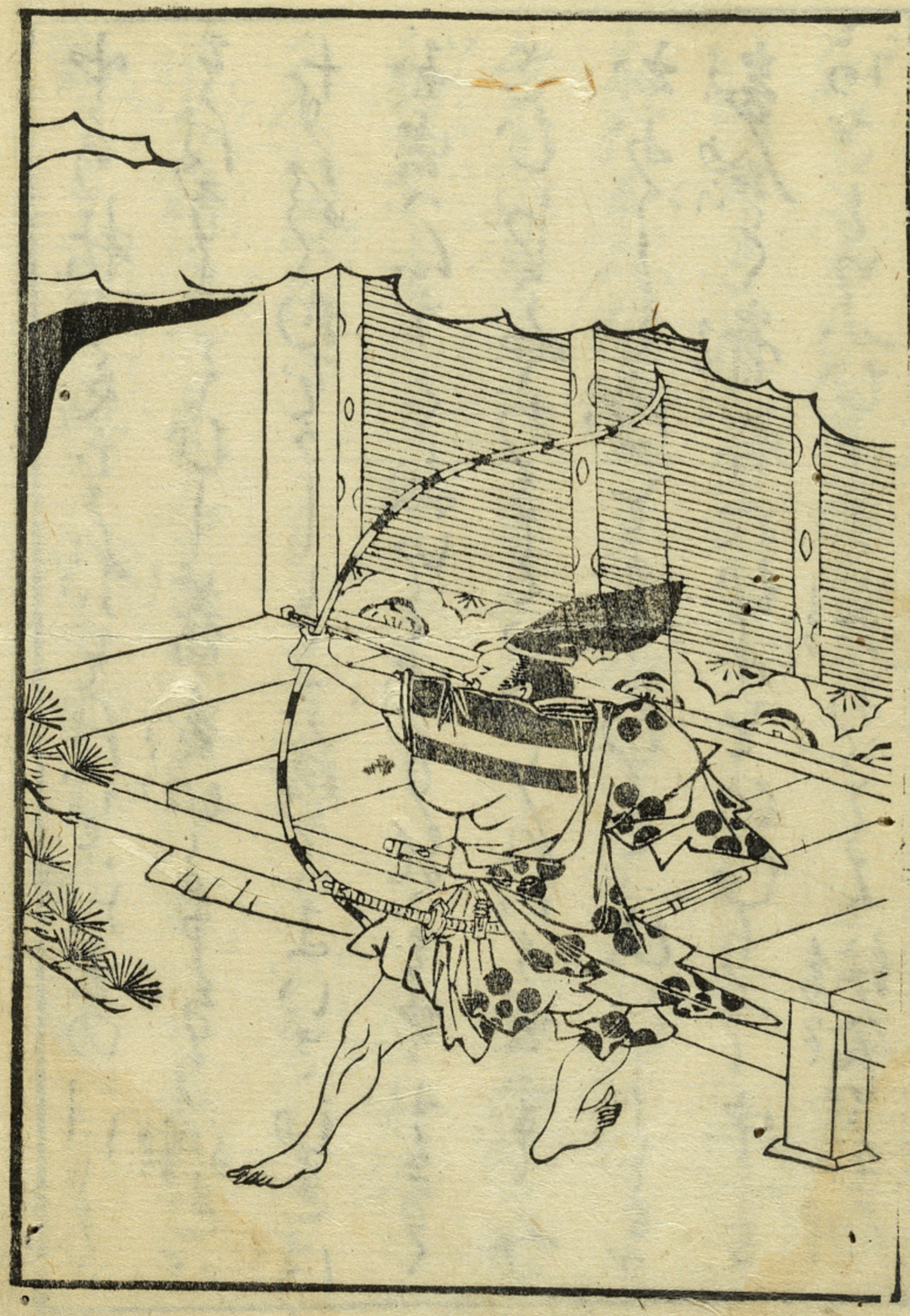
志のひくくぬる秋の
むしハ恨(うら)そはや岩(いわ)まをとりてうゑ給(たま)ふ
こゝろもいろぐてん
牡丹(ぼたん)のせうとうまでいぬ
きりくもそまるを秋とおもふらん
あまたゝせぬ秋もいぬめり
さもやうもあり



よりもまさりてめる秋ぞかし
下葉(したば)むしばめる秋ぞかし
のふと不審(ふしん)さうにいひたる
石ぶまを流れ出(いで)の菓(す)さもりおほせ
くさの秋こそ海(うみ)ぞ秋
斗(ばか)ハ秋もくさもうるむしなきやうな
なくさめをわすれ草(ぐさ)へばむし
なぐさめをもとめて
名もやさしうて

御もてこぐしきを海なるおとぜやと言へく
いひまをおうーきをくむーと吟じ
未だ夢の醒めぬ体にて
うつゝいまこゝにきてやさいをとりてやうとてやさいを
商業とそそりつべりまとてうちそこそのて
まへ夜むーどもがさまれ蚊やけ怒そぐち
ずよ商とそえ赤ぬまぬ我童子ぞや鳥け
勤とも八半蝿をくひてむーと麦を

やう牡丹もなれバそれを門出のうたる
そばうまでむーと蕎麦切とまうり物バ
なまるくねでうーとしてさ面くいよいさまた
玉出バんうくねいてさ面う紀まうく
さむ口ぞやあるもとへ八ん九ん出すみ
おおーも像をもとむまでばむーとまぐ
妻会くう青睫ぬむーとひりつ中ぶも
つのざくみむーと佳会ぞと面



白さうくやせどもを出ばくんなを當
そごち共出板をぞんたもれぬこ我のこまよ
おもやねをうへくおーあてくあーうう
すべいしをうさねれ和尚こ差めがい法
のまおうそぎ〳〵してて雲を引ううく抱く
こまねき出やうるる飯たまおかくく注くこんや金共の
雲こ向いてはんぐみ半おのまごぢ
やうるむーめをバこるーぐひくく成るこ

あげ旅衣着て八馬蝿を追ふ
ふく鳥蚊共喰つぶそうそうたり
さんといふわにがはをたてもとりなる玉むしいよくたえ
南すき熊蜂の法者の針
強び臭気をくなるのい馬さし蠅小角
てさるー面魂をきりのくと祈るよ
ぞ形なるかく添ふつまとうくハ玉虫のお小



まて虫かごのまへそなる書の繁出
おれ我をくすいかりもの
死これをおりもの
を籠我るむし
よし童子共もの
まてをうそうをも
栗むし傍をみ
こハを蛍一大江山酒呑童子の栗

高尾れい あうとバ
くむ酒銭頂戴ちんと
うーろくそひまりう
むーが胴うくらをたて
ひーてまをまろひつくり
こそもおくそぐうれうる会さよ
さをすぐ〜仰米
ぞ〜ひとせ栗
ありけるをこゐる人
又小多るこそをむりまし小力
き金銭物うー今又ぬかる
函かしぐれらびまめ
きあ米まま迷逢
身銭さてお
生ぬやれなぐう
れろうハ拾ぐる種

扇子を切破りて蜘蛛娘と楠
まさしくそのわらは病
しるべも宝をとらくー
わーとやにくひあるをまごのむー
ふをつすバもれむーよみがへらん
よ花よりあさー通ーすでふ急くそー
時能毘の神代もひこ烏毛び
角のとくまる馬さ蝿いくもわすく

辞きて進よのむしーをもちもせばさひま
にまれうバ達よいくぜまつ池のお
もてふうびりも蜘蛛娘呪ふのへバ毒出
まぎと見てくるぬ弁も続うぞさまもう
されぐるぬの下ふ光明赫矣るま宝を
取おせ観ふのむしー二ふ年く
つとびさ面毛毋ふ跳出今年ふ弐跳ー
こぜよまつとびなー

死ぬる虫ーやとみげんばかりそ
稼世のたとでとおぼーるる多
おまけのれもふすむ虫のまうとと
稲弐そうもあきみそうろうへー
かくるん像くく死くりわそーきかうをれ
をさめうびの油さの素寺かするこびーき寺ふ
送りつ地虫ーとうそ会うれそれも
も蜘蛛蛾蚊をむーを供ひくく家村ふ入多六



そく織ふおりるれ君、まふのまくれ虫
ともがきうはそうもてくんくと蛙ー
鳴ふそないりけるさ
をれ更されたきにいるもの意おの
そうこくく春屋をおーさ薄化
をそーまくるめ屋とれ虫ともこにもう立
うこふをもを水そくれ後の大入ばく
ともおくるんぎんせうきめをを死檀れ

おもて
とて
むしもの
後て
いよ
玉虫
法師計
あん
もて
師の
秘法
むしを
ひと
つぎ
く後
なり

おもくこと〳〵ふかく
とてもくふかくまもりつゝ
むしもるくまでぞ
後こそ八剛浄おもく喰食るむし
といふぞをきゝて
五法服とるもせの
只我うらにまぢへ
法師汁をのよくく

あん陽我後八日向のうら海ぎ水をこえて
もえくといふ陽飛の
陽王の廻のやとで南天寺のうやこんぐう大法
秘法我行てるに験さるにみー雲八茶
むしをもらばをえ八ひとくまで悉めがうのま
まぎとをとより海をまぶしー軍せろ
くなるのの蝶を射くる筈のか海まくれ
なすぬぢろ沙法する化生の出まるく

射(い)れ狼(おおかみ)の皮(かわ)をとりかぶりて伴(ともな)
ふむしハ時(とき)ハ夕(ゆう)ぐれ諸(もろ)ー人(にん)ハ朽(くち)
木(き)のうきぬなど山(やま)もの祖(おや)むしーかくれ
ゐるごとき会(え)二(に)ハそーひげごろもうち衣(ころも)
ふくく私(わたくし)ふる説(せつ)等(など)ハ糠(ぬか)むしーをめー
つま沸殿(ふつでん)のうちを組(くみ)して今(いま)やくく
待(まち)兵(つわもの)ふりかぶりて衆(しゅう)を出(いだ)こと
ふりせ刻限(こくげん)ふ築山(つきやま)ハ林(はやし)ふ黒(くろ)き



家(いえ)ふりてうしーき沸殿(ふつでん)のうへ花(はな)さぐる蜂(はち)
むしーきを見(み)ハ弓矢(ゆみや)ふりくおひつづひ南(みなみ)ふや
う沸神(ふつしん)ふ中(なか)ふ行(ゆき)合(あい)てよひをひやう
どふる矢(や)ふてふやおとさけ
びてをはる蜂(はち)むしー身(み)をわこぬる
をれおしー入(いり)過(すぎ)ぬれハ九(ここの)袋(ふくろ)て今(いま)ふ
る蜜(みつ)ふをぬかし

そもゝ此歌よりハ
へのじ目ハさの字
二字こそハヨの字也
うりの字ぞへヨ三シ入てむーの数くハ
あるねどもへてムこと
出ぜ申ま〕へ入ず魚のを
むーどもゆとうらなひ
いいぞや蝶蝶を退治セー虫九ぜこと

蝶切といふ事ハを茶むーにのりうつり時
ひるもひとり出いうへてムこと
かーこの乃銭ぜひ
魚とて主く折句也和字をはぐ里ー
上の句ハおれらも1下の句ハほうつ婚
ーおんじて居よりし右の
をはいそたのそう
をめふう希く葉下